三日市遺跡調査概要Ⅰ

昭和６０年３月

三日市遺跡調査会

序　　文

河内長野市は古来より生活環境に恵まれた土地であります。

ましてや三日市地区については、高野山参りの街道の宿場として栄えた土地であり、近年は、各地で宅地開発が行われ、大阪のベッドタウンとしての新興住宅地が急増し、人口増加に伴なう道路網、交通網等都市的機能を整備する必要性が強く求められてきています。

今回、住宅・都市整備公団の委託を受け南海高野線三日市町駅東側に接する地域の三日市町駅前整備に伴う片添地区特定区画整理事業を行うに当り遺跡調査を実施するものであり、昨年度財団法人大阪府文化財センターにおいて試掘調査がなされた結果に基づいて、本調査を昭和60年１月より実施致しました。その結果、平安末～鎌倉・室町時代の遺構や遺物が出土し、当時の当地域の集落のあり方を知る貴重な資料が得られ、古墳時代の包含層及び遺物群は、それ以前の当該地域の歴史を把握する上で注目されます。

今回の調査は昭和59年度分として、単年度調査という限定された条件の中で得られたものであり、今後各年度ごとに調査を進めていく中で、三日市・片添地区の遺跡の全体像を把握し、復元出来るものであり、当該遺跡の重要性を理解し得るものと確信すると共に、当該地域の開発と埋蔵文化財の保護・保守について大きな役割をしたものと評価する次第です。

最後に調査を実施するにあたって御指導・御協力を賜わった地元地主・大阪府教育委員会・河内長野市教育委員会・住宅都市整備公団・同三日市工事事務所の関係各位に、心から感謝いたしますと共に、今後とも当調査会の事業に一層の御理解を賜わりますよう御願い申し上げる次第です。

昭和60年３月

三日市遺跡調査会
理事長　平　井　義　信

例　　言

1．本書は河内長野市三日市町、片添町に所在する三日市遺跡の昭和59年度調査概要報告書である。

2．本調査は、三日市遺跡調査会が住宅都市整備公団の委託を受けて行った。

3．現地調査は、昭和60年1月7日より同年3月31日まで行った。

4．本書の執筆は、Ⅰ—峯正　明、Ⅱ—加藤博章、Ⅲ—尾谷雅彦、Ⅳ—亀山　隆、高　正龍、Ⅴ—尾谷雅彦が各分担をした。

5．遺物整理、実測、トレースは四宮加容子が総括担当した。

6．本書の編集、最終的な文責は尾谷雅彦が負う。

7．遺構実測の1部は航空測量を行い、株式会社大阪写真測量所に委託した。

8．調査実施にあたっては、大阪府・河内長野市教育委員会、住宅都市整備公団関西支社、同三日市事務所、河内長野市都市整備部、南海三日市共同企業体、南海電気鉄道株式会社、地元地主の方々の協力を得た。

9．調査作業においては、株式会社大林組の協力を得た。

10．本書の作成については、河内長野市管理部社会教育課課長補佐峯　正明、文化係長加藤博章、橋本　亨の協力を得た。

凡　　例

1．遺物実測図の番号は写真番号と同じである。

2．遺構番号の頭文字は略してあり、以下の通りである。

溝ー溝、井戸ー井、建物ー建、土器溜め一土溜、集石ー集、方形石組ー方石、土壙ー土

3．遺構全体図の縮尺は1／160、1／200である。遺物実測図の縮尺は1／3である。

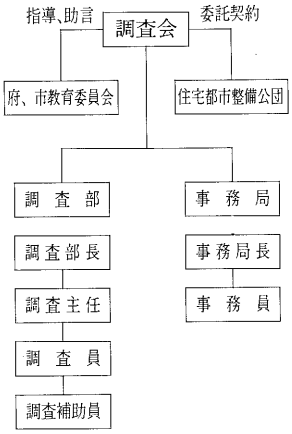
4．遺構実測の区割は国土座標軸を用いた。

Ⅰ　調査組織体制

当該発掘調査を円滑に推進するため、大阪府教育委員会、河内長野市教育委員会、及び住宅都市整備公団との協議により、河内長野市教育委員会教育長を理事長に迎え、「三日市遺跡調査会」を昭和59年10月18日付で設立した。

調査会には、理事として関係行政機関の職員及び学術経験者10名をもって構成し、調査部と事務局を設置し、発掘調査を実施している。

三日市遺跡調査会機構図



理事長　平井　義信　河内長野市教育委員会教育長
理　事　吉房　康幸　大阪府教育委員会文化財保護課長
〃　綱干　善教　関西大学教授
〃　中村　浩　大谷女子大学助教授
〃　水口　知治　河内長野市教育委員会管理部長
〃　石橋　勝　〃　指導部長
〃　向井　亨　河内長野市都市整備部長
〃　野手　正夫　〃　市長公室長
〃　西久保弘成　〃　総務部長
〃　大谷　隆彦　〃　教育委員会社会教育課長
事務局長　上野　英一
調査部長　井藤　徹　大阪府教育委員会文化財保護課主幹
調査主任　尾谷　雅彦　河内長野市教育委員会社会教育課
外業調査員　高　正龍、亀山　隆
〃　補助員　安木　真治、松本　准一、山崎　正芳
内業調査員　四宮加容子
〃　補助員　谷口　和美、橋本ひとみ、鈴木　雅子、福武世志子
事務員　宝田　忍、谷　健二

Ⅱ　調査にいたる経過

昭和44年秋から同45年春にかけて実施された、河内長野市三日市町所在の大師山遺跡及び大師山古墳の発掘調査が終了した翌46年、同遺跡の南側に続く片添町の丘陵地一帯を、関西大学文学部考古学研究室の協力を得て、河内長野市教育委員会が実施した埋蔵文化財分布調査の結果、当該地には土師質及び瓦質の土器片が相当数散布していることが確認され、埋蔵文化財包蔵地である可能性の高い場所として注目されるにいたった。

一方、河内長野市は、急速に住宅地として発展してきた南海高野線三日市町駅前の整備計画を策定し、当該地域を区画整理し、駅前開発の中心的地域とする方針に基づいて、その事業の実施を住宅都市整備公団へ依頼した。依頼を受けた同公団は、その後必要な用地の確保並びに地権者への事業説明や協力要請を積極的に実施し、昭和59年度事業認可手続きのめどが立ったことから、埋蔵文化財の取り扱いについて、市教委を通じて府教委に協議することになった。協議を受けた府教委は、前述の分布調査の結果に基づいて、当該事業対象地域が埋蔵文化財包蔵地である可能性が極めて高いことを説明し、地表面の観察による遺物の採集より精度の高い部分的な発掘調査を実施する必要があること、その取り扱いについては、調査結果に基づいて再度協議をすること、あわせて当該発掘調査を財団法人大阪文化財センターに委託されたい旨回答した。回答を受けた同公団は、数回にわたり調査の方法や実施時期及び必要経費について、同センターと協議し、昭和58年12月５日付けで発掘調査の契約を締結した。現地における調査は、昭和58年12月６日に着手し、昭和59年３月８日に終了した。

その結果、部分的な発掘調査を行ったほぼ全域から遺構及び遺物が確認され、当該地一帯は大規模な遺跡であることが実証された。このため、府教委、市教委、公団の三者でその対処について充分協議を行い、59年５月当該地域の発掘調査計画が決定した。そして10月１日調査実施の主体として、府教委、市教委、市、学識経験者からなる三日市遺跡調査会を結成し、同公団と調査会との間に11月１日付けで契約を締結し、１月７日から現地調査に着手した。

Ⅲ 位 置 と 環 境

1．位　　置

当遺跡の所在する河内長野市は、大阪府の東南に位置する。現在の行政区画では東は南河内郡千早赤阪村、西は和泉市、南は府県境を隔て和歌山県に接し、北は堺市、南河内郡狭山町、富田林市と接する。遺跡は河内長野市三日市町、片添町に所在し、南海高野線三日市町駅の東南に位置する。

2．地　　形

当遺跡は、本市の南端、東西に走る和泉山脈から北に派生する丘陵性山地の１つの末端部に位置し、標高120～180m。遺跡の西側を石川の支流天見川が北流しながら天見谷を出て、やや流れをゆるめ河岸段丘を形成している。遺跡の北西近くで、同じく石川の支流石見川が狭小な谷を刻んで天見川と合流し、石川の流れとなって大和川へと北流する。

3．周辺の遺跡

市内で最古の遺物が出土したのは、現在のところ、旧石器、縄文時代の石器が採集された寺ヶ池堤である。なお、縄文時代の土器片が三日市遺跡でも出土している。

弥生時代に入ると前期の遺跡は発見されていないが、弥生時代中期になると、富田林市との市境に位置する塩谷遺跡がある。後期になると大師山遺跡があり、この遺跡は丘陵上に位置し、高地性集落と考えられている。

古墳時代は、弥生時代後期の遺跡である大師山遺跡と重なって、大師山古墳が出現する。古墳は前方後円墳で粘土槨と推定され、内行花文鏡や、碧玉製の石製品、鉄製品が出土している。後期になると、塚穴古墳、宮山古墳、烏帽子形古墳など、横穴式石室墳が分布している。古墳時代の集落遺跡は現在のところ未発見である。

奈良、平安時代、特に奈良時代については、遺跡の数は少なく、火葬墓と考えられる小山田１、２号墳がある。平安時代に入ると、観心寺、河合寺、金剛寺などが文献上に現われ、これら寺院の荘園も市内に分布している所から、遺跡の存在が予想される。

中世、特に鎌倉時代末から、室町時代初期にかけての南北朝動乱期に、市内の丘陵末端部や山地頂上に城郭が多く築かれる。市域は南北朝動乱以降、安土桃山

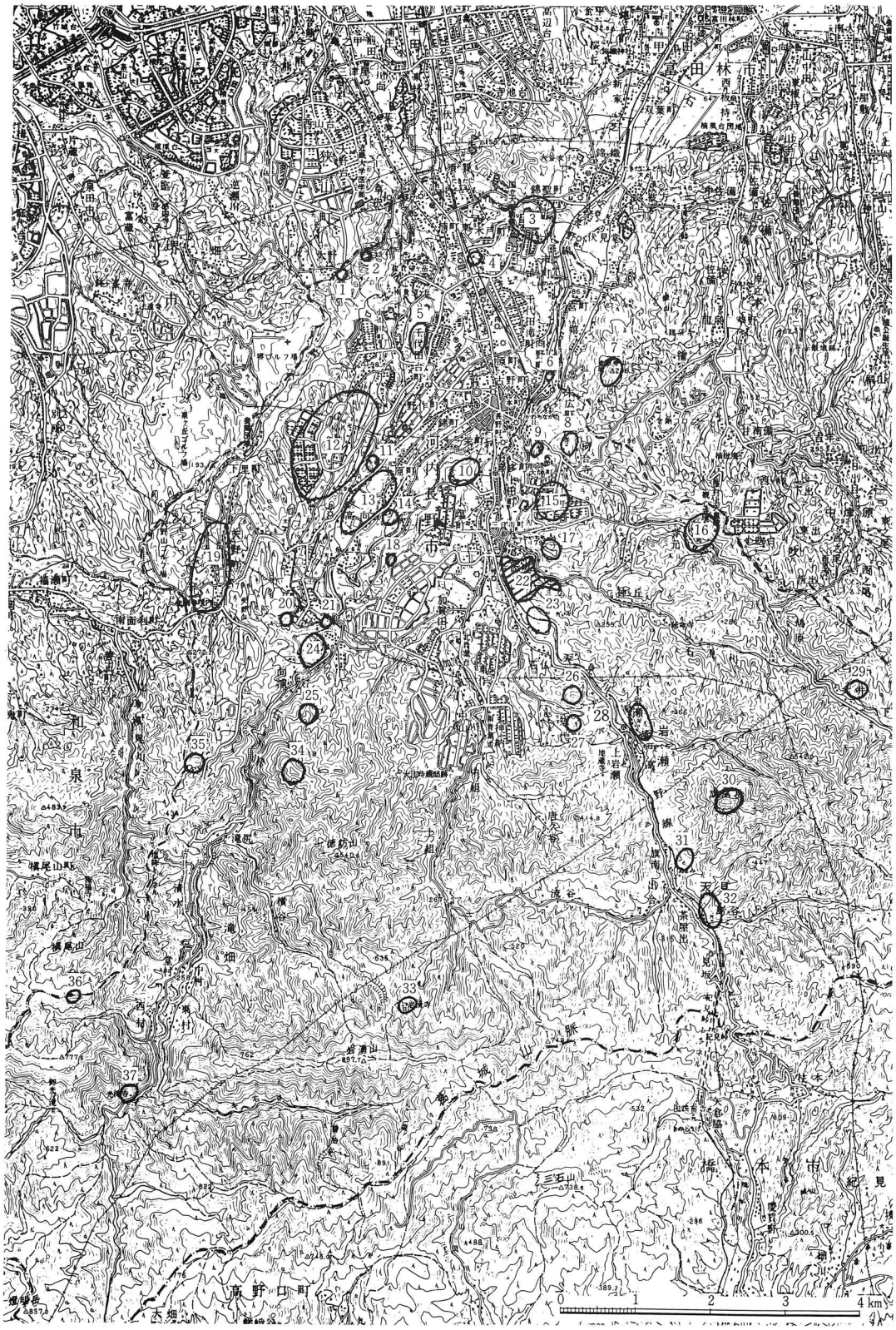
時代まで戦乱にさらされ、多くの城郭が後世まで利用されている。

この様な歴史的環境の中で、14C代の遺跡としての三日市遺跡の位置は、南河内の室町時代初期（南北朝の動乱）前後の時代の重要な位置を占めるものである。

遺跡分布図　遺跡名　1．小山田古墓1号墳　2．小山田古墓2号墳　3．塩谷遺跡(弥、中)　4．菱子尻遺跡　5．寺ヶ池遺跡(旧石、縄)　6．古野古墳(古、中、消滅)　7．金胎寺遺跡(中世、城)　8．河合寺　9．河内城、末広窯(中世)　10．烏子形城(中世)　烏子形古墳(古、中)　11．塚穴古墳(古、中)　12．長池窯跡群(中世)　13．高向遺跡（官大寺跡）　14．惣持寺跡　15．大師山遺跡(弥、後)　大師山古墳(古、前)　16．観心寺　17．片添城跡(中世)　18．宮山古墳(古、中)　19．金剛寺　20．仁王山城跡(中世)　21．日ノ谷城跡(中世)　22．三日市遺跡(古・中、中世)　23．石仏遺跡(中世)　24．観音寺跡(中世)　25．稲荷山城跡(中世)　26．石仏城跡(中世)　27．左近城跡(中世)　28．清水遺跡(中世)　29．深田城跡(中世)　30．旗尾山城跡(中世)　31．天見駅北方遺跡(中世)　32．蟹中淵遺跡(中世)　33．岩湧寺　34．旗蔵城跡(中世)　35．国見城跡(中世)　36．猿子城跡(中世)　37．光滝寺

旧石―旧石器時代、縄―縄文時代、弥―弥生時代、古―古墳時代、中世―鎌倉、室町時代、中、後は中期、後期

写真1　遺跡全景航空写真



第１図　河内長野市遺跡分布図

Ⅳ 調 査 成 果

1．進入路A地区（Ⅲ－T）〔第2図〕

この地区は標高150～160mの舌状台地上に位置し、遺構は地表から40～80cm下で検出された。ここからは中世（14C末）の集落址が検出されたが、調査面積が狭小な為、その面的な広がりは握めなかった。多くのピット・井戸・土器溜め・集石土坑・方形石組み・土坑・溝の各遺構を検出した。

A．掘立柱建物

多くのピット群の中で確実に確認できるのは一棟分だけである。

建物3－1　南北3間（6.52m）、東西2間（3.76m）で、長軸を南北にとるがやや東に傾むく。周囲に南北9.2m、東西5.0mの隅丸方形の溝がめぐる。

B．井　戸

井戸3－1　上端で長径72cm、短径56cmの楕円形の平面を持つ、深さ2.7mの石組みのもので、底部から不明木製品が出土している。

井戸3－2　上端で長径3.7m、短径3.0mの楕円形の平面を持つ、深さ1.1mの断面形が摺鉢形を呈しており、鋤などの木製品と石臼が出土している。

C．土器溜め

土器溜め3－1　南北1m、東西1.5mの規模で、遺構を伴なわず、瓦器・土師質の皿などを多く出土したが、その性格は不明である。

D．集石土坑

集石土坑3－1　長径1.8m、短径1.2m、深さ30cmの楕円形の土坑に大小の石が存する。溝3－3とつながるが、性格は不明である。

集石土坑3－2　長径3.0m、短径2.6m、深さ15cmの楕円形の土坑に長さ40cm以内の大小の石が集石する。埋土は焼土と炭を含み、石を除去すると押しつぶされた形で土器が出土し、砥石の出土も見る。性格は不明である。

E．方形石組み

方形石組み3－1　平面が内方1辺2.5mの膨みを持つ、正方形を呈する石組みで、高さ0.25m、2段目まで石積が残っている。集水施設と思われ、大形甕も出土している。

PL 2

進入路A　全景
（航空写真）
（南から）

方形石組　3－1
（南から）

井戸　3－1
溝　3－2
（南から）

F．土　　坑

遺物を含むものに限り表示する。

番　号	短　径(cm)	長　径(cm)	深　さ(cm)	備　考
3－1	100	105	10	焼土坑
3－2	120	140	21	〃
3－3	124	222	27	〃
3－4	84	88	13	〃
3－5	76	80	18	
3－6	72	76	31	
3－7	72	?	27	
3－8	62	66	49	
3－9	52	58	16	
3－10	70	84	36	
3－11	88	114	46	
3－12	76	80	33	焼土坑
3－13	54	60	23	〃
3－14	60	64	17	〃
3－15	68	96	23	
3－16	68	80	30	
3－17	68	?	37	
3－18	65	73	10	
3－19	96	134	46	

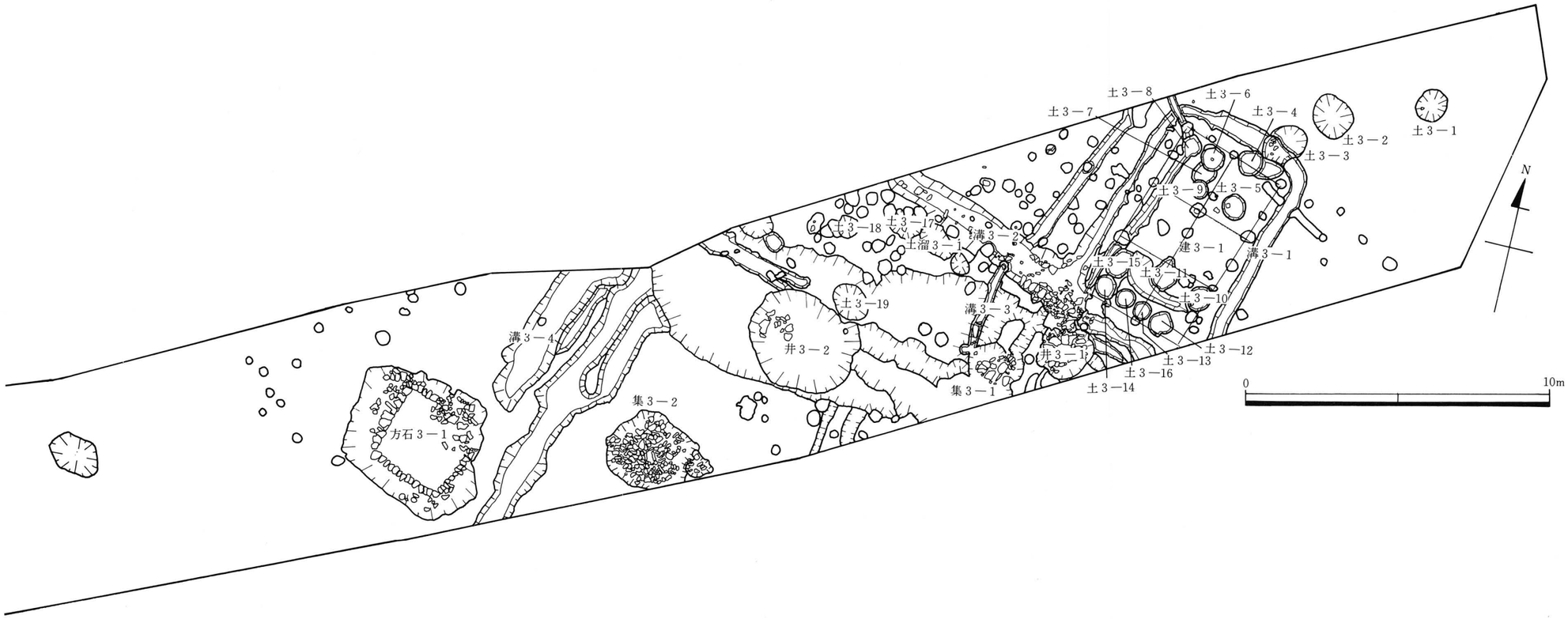
表1　土坑計測表

G．溝

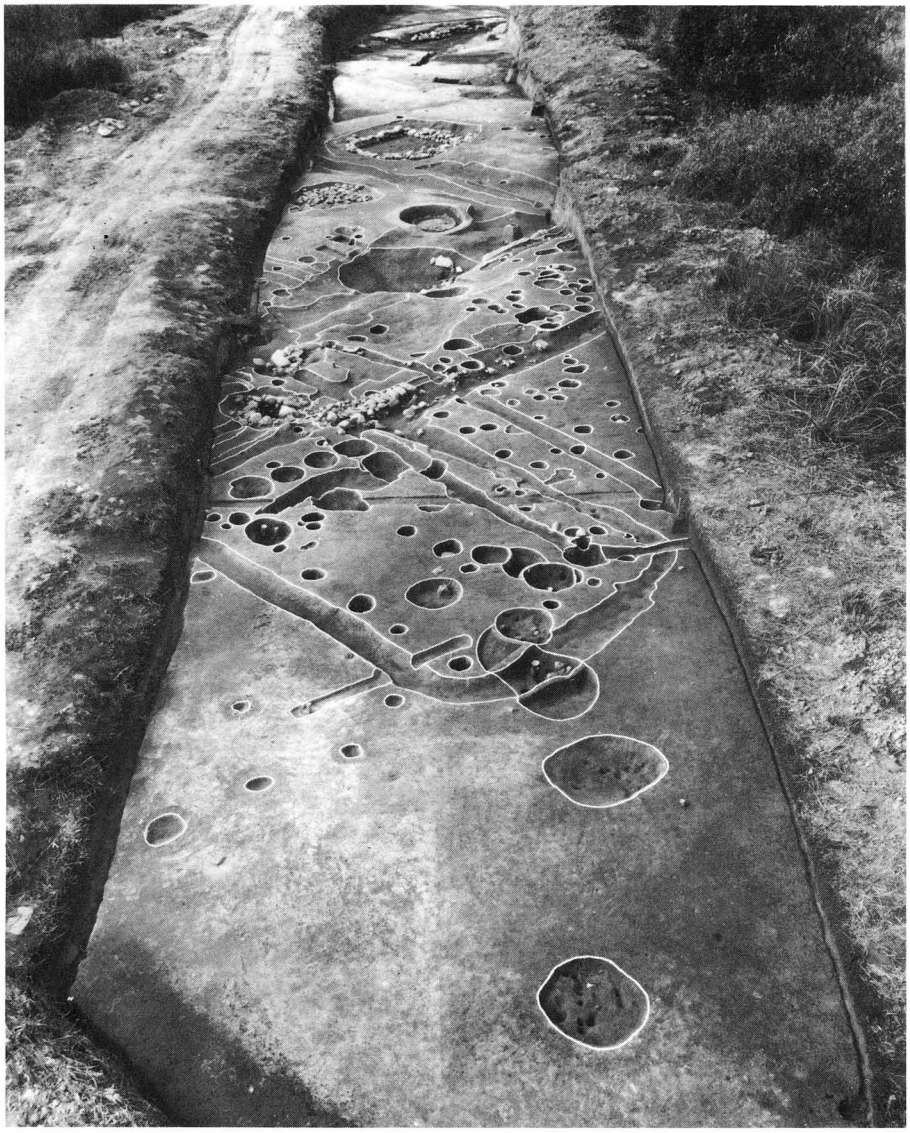
溝は全部で16条検出されたが、ここではその主要なものだけを取り上げ略述しておきたい。

溝3－1　前述した通り建物3－1に伴うもので、南北9.2m、東西5.0m、長方形状にめぐり、幅0.3～0.7m、深さ10cmである。

溝3－2　井戸3－1と関連のあるものと思われ、検出長8m、幅0.9～1.3m、深さ15～20cmである。井戸に隣接した部分には長さ2.3m、幅0.4m、帯状に石と



第２図　進入路Ａ地区平面実測図



進入路A　全景

（北東から）

井戸　3－1（北から）

井　戸　3－2（東から）

平瓦を敷いている。この施設に近接して比較的多くの土器が出土している。

溝３－３　集石３－１とつながる溝で、長さ3.2m、幅0.25～0.35m、深さ８cmである。

溝３－４　検出長6.1m、幅1.1～1.5m、深さ12～35cmで、この地区で検出された溝としては最大のものである。

２．進入路Ｂ地区（Ⅲ－Ｍ）

この地区は標高150m前後の南から北へなだらかな起伏を有する台地上に位置し、北側と東側は谷によって落ちる。ここでは、地表0.3～0.6mから掘立柱建物１棟、溝２条、土坑４基、その他多数のピットが検出された。また出土遺物は、瓦器・土師質土器・磁器などで、他調査地区と同じく、14C末のものと思われる。他地区より磁器が土器に含まれる割合が比較的多いようである。

調査日程上の都合により、遺構平面図が完成を見ず、その詳細については本報告に譲りたい。

３．本調査区（Ⅰ－Ｆ・Ｅ）〔第３図〕

本調査区は西に延びた標高約140m程のゆるやかな起状を有する台地上に存在し、北側は谷状を呈し西端は南海高野線によって削平されている。

検出された遺構は掘建柱建物６棟・土坑48基・土器溜め・溝・柵列・集石・ピットである。

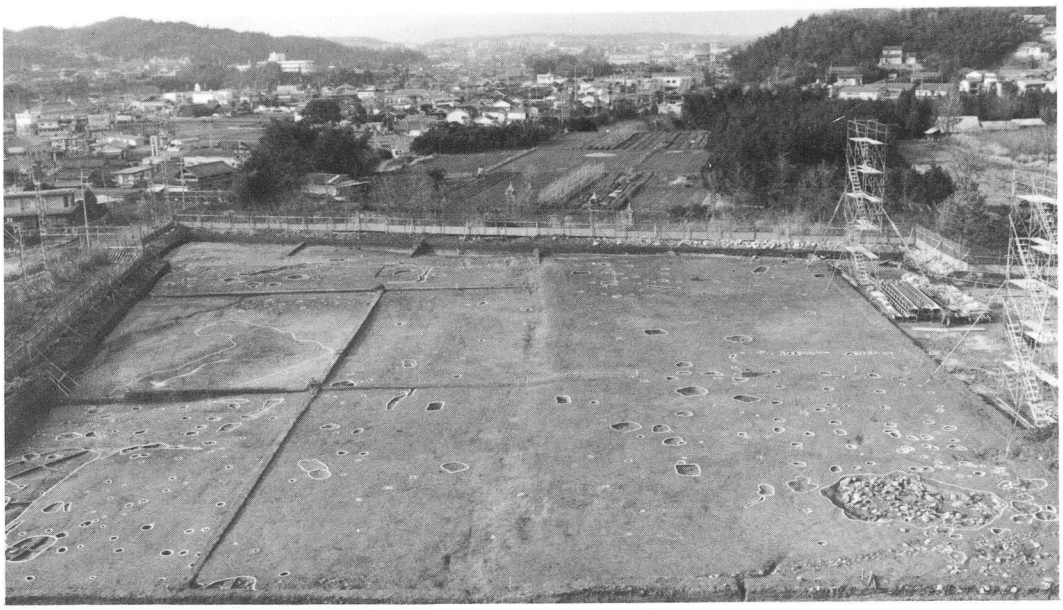
Ａ．掘立柱建物

建物として確認し得たものは６棟である。

建物１－１　南西寄りの建物群の１つで、長軸を南北にとり、東西２間（4.35m）、南北３間（6.55m）で、建物群の中では最も中心的な建物と思われる、また柱穴内から瓦器椀が出土している。

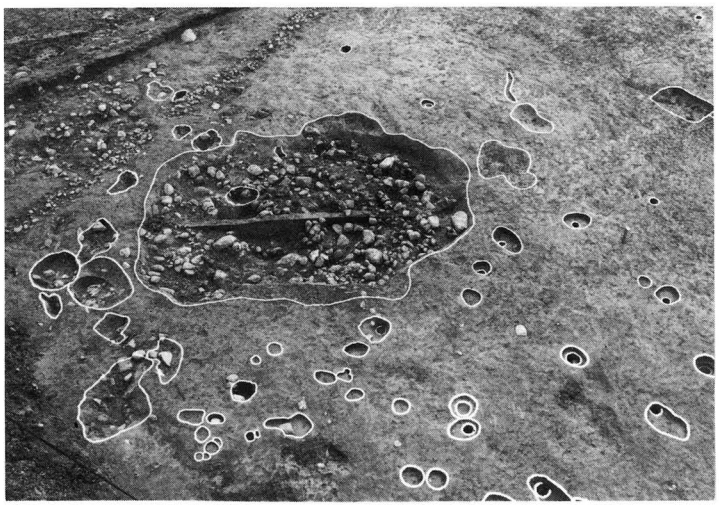
建物１－２　建物１－１とほぼ軸を同じくする。東西２間(4.0m)、南北３間(6.0m）である。南側の集石土坑にかかっており、その部分での柱穴は検出されていない。建物１－１との間に、柵列と思われるピットが並ぶ。

建物１－３　建物１－２と重複している。集石土坑にかかっており、全体規模の復元は不可能である。長軸を南北にとるが、若干西に傾く。現段階で東西・南北



本調査区全景(南から)

建物１―１・土坑群　(北から)



集石土坑１―１　(北から)

共に１間であり、東西の柱間は3.2m、南北は3.6mである。

これらの建物群のうち、建物１－１と１－２の周りに柵列がめぐる。建物１－２と１－３の時期関係については不明であるが、建物１－１と１－２はほぼ同時期と見て相違なかろう。

建物１－４　Ｅ区北寄りに有り、南北に長軸をとる。現在確認可能な限りでは、東西１間（2.75m）、南北３間（7.2m）で、単独で存在する。

建物１－５　調査区西寄りに存在し、長軸を東西にとる。南北２間（4.8m）、東西３間（7.2m）を呈する。北辺は若干標高が低かった事もあり、柱根がよく遺存している。

建物１－６　Ｆ区南側に存在し、長軸を東西にとる。南北２間（3.45m）、東西２間（4.25m）を呈する。この建物に重複して柱列が見られるが、建物として検出するに至っていない。また、建物と柱列の新旧関係も不明である。

Ｂ．土　　坑

総計48基検出されているが、明確に、時期、性格を把握しうるものはなかった。

然しながら、検出された22基の方形土坑は、１辺100cm程の長方形を呈しており、壁面が焼けており、内部に炭化物を多量に含む、褐灰色土が入っている。深さは平均して30cm程で、内部から特に遺物は検出されなかった。概ね、長軸を南北（若干西寄り）に取る為、一連の関係は認められるものの、建物との関係、時期については決定が出来なかった。また土坑自体の性格についても不明である。

Ｃ．土器溜め

土器溜め１－１　Ｆ区建物１－５の北辺、内側に存在する。谷状の落ち込みが埋没した後に、穴を掘って土器を投げ込んだものと推測され、建物よりは時期が新しいものと考えられる。出土土器の種類は多く、瓦器埦、瓦器皿、土師質小皿、白磁皿が見うけられる。又、鍬先と思われる鉄器も出土した。

Ｄ．溝

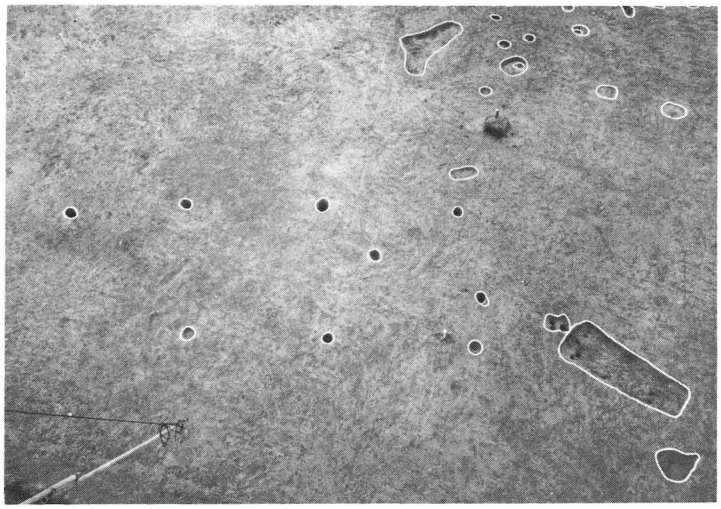
明確に遺構と把握しうる溝は６条検出した。

古墳時代の溝

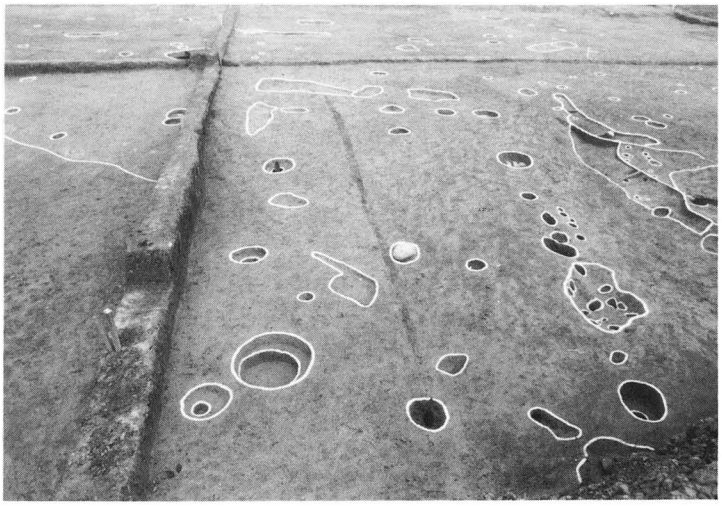
現段階で調査区北西端で２条検出されている。

溝１－１　これは調査区西端で側溝を掘る際、須恵器短頸壺が出土した事から、溝の存在が確認された。大半は調査区外にあり、遺構として検出したのは東端に

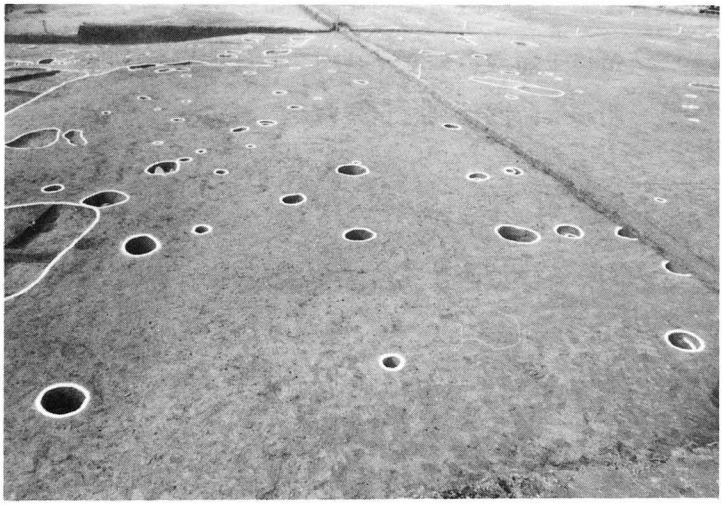
第3図　本調査区平面実測図



建物１－４
（東から）



建物１－５
（西から）



建物１－６
（南から）

過ぎないが、検出されている遺構は幅2.55m、検出長1.22mを計る。

遺物は前出の短頸壺の他に、須恵器台付壺・杯身が検出された。遺物から溝の年代は、6C後半のものと考えられるが、その性格については不明である。

溝1－2　幅1.5～2.0m、残長6.4mを計り、南西から北東にのび、北東で後世の削平を受けている。溝内に2ヶ所の土坑を有し、その中より須恵器杯身片を検出した。溝1－1と同様6C後半のものと考えられるが、溝の性格は不明である。

中世の溝

溝1－3　建物1－5、1－6の西側から調査区外へ延びる。幅は1m弱で南東にコーナーを有し、検出長10.7mを呈する。北端で短辺2m、長辺3.6mの長方形に広がる。溝内から瓦器埦と土師器小皿を検出しており、これら遺物とほぼ同時期の14C末と考えられる。しかし建物との関連、溝の性格は不明である。

溝1－4　溝1－2の東端と一部切り合う。切り合い部で北へ曲るコーナーを有し、そこで後世の削平を受けている。

幅は0.8～1.0m、残長10.8mを計る。性格は不明であるが、溝内より瓦器埦が出土しており、14C末のものと考えられる。

溝1－5　幅0.1～0.4m、全長7.5m、深さ0.2m弱の溝で、西から東へ2.5mのび、そこで直角に曲る。コーナーを有し、北側を溝1－4で切られている。溝のもつ性格は不明である。溝内に、炭化物と焼土の入ったピットと、瓦器、土師質土器破片が出土している。溝1－4より古いものと言えるが、あまり大きな時間差はないものと考えられる。

溝1－6　調査区北側の谷状の落ち込みを呈する位置で検出された、F字形の溝で、東から西へ11.5mと15mの位置で北へ直角に曲る。幅は0.3～0.8mで、深さは0.15m弱と浅い。溝のもつ性格は不明であるが、溝内からは須恵器片、瓦器片、土師質土器片が出土しており、明確な時期は判断し難いが、溝1－3～5とほぼ同時期と見て相違ないと考えられる。

E．集石土坑

集石土坑1－1　建物1－2の南に一部重複して存在する。長径5.3m、短径4.1mの楕円形を呈し、深さは0.7mである。人頭大の河原石が詰まっている。出土遺物は、須恵器、土師質土器の小片が数点出土したのみである。明確な時期、性格については不明であり、又、建物群との新旧関係も不明である。

その他、本調査区北側は谷地形を呈しており、調査区南東部1／4には大きく北側に標高を下げているがピットなどが分布している。

本調査区全域にほぼ遺構が分布していた。

4．出土遺物〔第4図〕

1～5が土師質土器、6～9、17・18が瓦質土器、10・11が須恵器、12～16が磁器である。

1～4は小皿で、1・2が進入路A、土器溜め3－1で出土。3が進入路A土坑3－6、4が進入路A、井戸3－2より出土。内面、口縁は横ナデ、外面底部は指押さえである。5は台付皿で、進入路A、土器溜め3－1より出土。内面は不定方向ナデ、外面は横ナデで、高台は貼り付けによる。

6は瓦器小皿で、進入路A、土坑3－17より出土、内面及び外面側部は横ナデ、外面底部は指押さえによる。7・8は瓦器椀で、7は進入路A、土器溜め3－1。

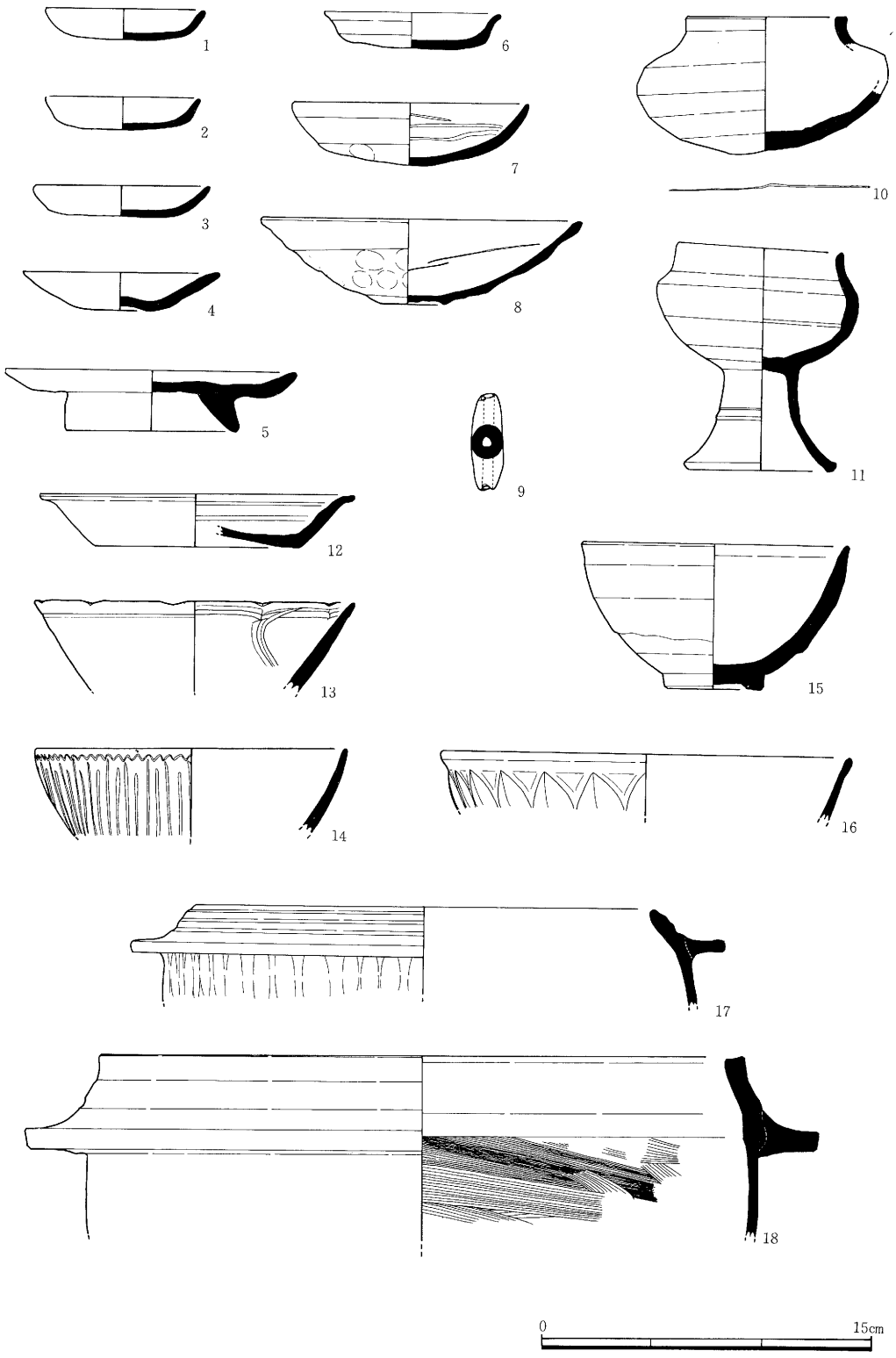
8は進入路A、土坑3－17より出土。内面はミガキで暗文が見られるが、本数は少ない。外面は指押さえによる。高台は貼り付けによる。9は土錘で、進入路A、溝3－2より出土している。

10・11は共に本調査区、溝1－1で出土。10は短頸壺で、頸部から肩にかけて横ナデ、端部、外面はヘラケズリであり、底部にヘラ描きが見られる。11は台付壺で、端部から肩にかけて、脚部、内面底部は横ナデ、胴部はヘラケズリである。

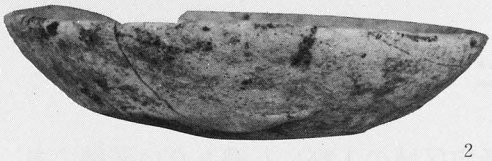
12は白磁皿で、進入路A、土器溜め3－1より出土。13は青磁輪光碗で、進入路A、粘土層より出土。14・16は青磁碗で14は進入路A、井戸3－2から。16は本調査区耕作土直下より出土している。15は天目茶碗で、進入路A、方形石組3－1より出土。焼成がやや甘い。

17・18は羽釜で、17は進入路A、溝3－4より出土。18は進入路A、ピット9内から出土している。鍔は貼り付けによるもので、17外面に接合時の指押さえが見られる。18内面はハケによる横ナデである。

これら他にサヌカイト製石器、鋤などの木製品、鉄製品が出土している。



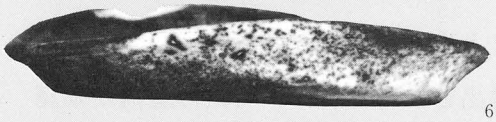
第4図　出土遺物実測図



2

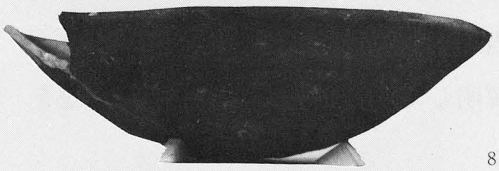
5

10



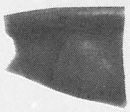
6

11

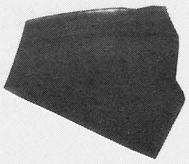


8

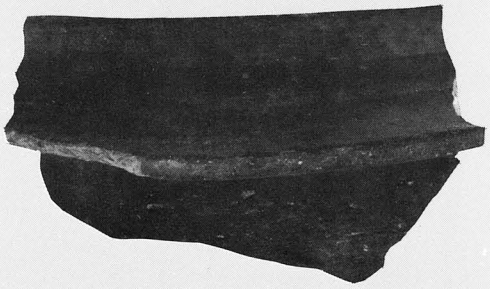
15



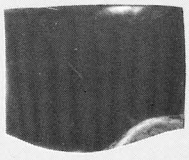
16



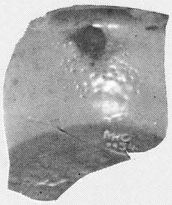
13



18



14



12

V　ま　と　め

今年度の調査は、三日市遺跡の全体調査予定区域の１割にも満たない面積であったが、数多くの知見を得る事ができた。

○　進入路Ａ、Ｂ地区は、前年度の試掘では調査が行われなかった所であり、まったく状況が把握されていなかった。しかし今回の調査は、この調査区の位置する標高150～160m の台地上に、中世の遺構が集中していることを十分に予想させる結果となった。

○　本調査区は、進入路に比較して、中世の遺構の分布がやや粗であったが、建物などに代表されるように、遺構のまとまりが良好で、各遺構の全容を把握する事ができた。また、進入路では検出された井戸や、石組の遺構が確認されず、更に、溝などの検出が少なかった。この事は、進入路と本調査区の遺構の構成に相違が有り、両地区の関係が注目される。また、古墳時代後期の遺構、遺物が検出され、中世以前の当遺跡の一端を知り得る事ができた。

上記の結果は、今後の調査進行において解明して行かなければならない問題を大きく２つ提起している。

○　標高150～160m の台地上の中世遺構群と140m の台地状に広がると予想される遺構群との関係を解明し、中世の三日市遺跡を復元する。

○　本調査区で確認された古墳時代後期の遺構群の拡がりを確認し、中世以外の時代の三日市遺跡を解明する。

来年度の調査は、引続き今年度の調査地区に隣接して行うが、今年度の調査から推測すれば、前年度の試掘結果から予想されたように、遺構、遺物が調査対象地域全域に分布するようである。